

## 上田久美子への作品インタビュー

このプロジェクトがスタートした時のタイトルは「*Quand le temps devient beauté?*」でしたね。あなたにとって、時間は美ではないということでしょうか？だとしたらその時間とはどんなものと感じているのですか。

上田久美子：かつて私は東京のオフィスで、9時から18時まで、実際のところ仕事があってもなくても、昼休みの1時間を除いては自分のPCの前で座っている必要がありました。時には働いているふりをする必要がありました。この8時間は、食べ物を買って家賃を払うために、私が行動の自由を体制側に売り渡している時間でした。何かの仕事をさせるためというより、まずは大衆の行動を制御することが目的とも感じ、グロテスクに感じました。一年を通して9時-18時で管理されていることも自分が機械になった感じがしました。季節によって明るくても暗くても7時は7時で皆が一斉に行動するとか、体制が設定した目盛りでしかない抽象的時間に人々が一切の疑問なく服従するのが気持ち悪いのです。

では美しい時間とは？

上田久美子：子供の頃、夕方になると、外が暗くなってくる感じに無性に寂しくなって泣き喚いて母親を困らせていました。大人になった私は、夕方という時間に浸ることなく、19時だから夕飯を食べて明日の仕事に備えて23時に寝ようとかいう段取り的な時間しか感じなくなっているけど、子供の頃の社会化されていない時間性は美に近いかもしれない。

H.ベルクソンが『時間と自由 (Essai sur les données immédiates de la conscience)』の中で、持続としての時間は等質ではなく、数学的に計測できない、と言っていますが、時間の近代化とは、人間の時間への概念を、その時々によって質が違う経験の持続から、等質な空間の中に等間隔に刻まれた点のようにしていくことだったと思います。

新しいタイトルは生殖に関するものですが、あなたにとって時間の近代化と生殖がどのように関連しているのですか？

上田久美子：友人が私に、母親としてのある体験を話してくれた時、近代化された時間とはちがうオルタナティブな時間が、出産や妊娠をする女性の身体を通して見つけられるかもしれないと感じたのです。

それは友人が、泣き止まない赤ちゃんを抱いて、どうしようもなくして駅のベンチで授乳する

ことにした時の苦痛の話でした。彼女の感じたところ、母乳を口からこぼしている赤ちゃんは他の動物たちともつながるプリミティブな時間性の中に生きていました。そこでは未来は志向されず、1日や1年が円環的な繰り返しである時間性です。一方で、周囲の電車や目的地に向かう人々はそれとは全く違う時間性に従っていて、今日より発展している明日という一点に向かって進んでいく不可逆で一直線の時間の流れを、1分の遅れも許されず必死で追いかけていた。彼女は母親として赤ちゃんの時間性に同化しながらも、周囲の線的な時間の強迫的な速さについていかなければならず、その二つの大きく隔たった時間性の間を彼女だけが行き来することに強い苦痛を感じた。この話を聞いて、私は子供時代の夕方の感覚を久しぶりに思い出したのです。

私は子供を産んでいなくて気づいていないけれど、母親になった人々は妊娠や出産、社会化できていない子供に寄り添うことを通じて、私が忘れていた時間性に戻るのだろうかと思った。その母親における時間性の変化は、社会的時間からの疎外、遅れへの不安を伴うのかと初めて自分のこととして想像してみた。それ以来、子供を持つ女性たちに、出産や子供にまつわる経験についてインタビューを続けていて、小さい子供を持つコラボレーターたちとクリエーションをしています。

#### インタビューすることで何がわかりましたか？

上田久美子：「*médiocre* な話でつまらないと思うけど」と言い添える人が多いんです。出産や子育ての話が女性たちがすることは通俗的だとこの社会の中では位置付けられてきて、今まで表立ってその言葉が取り上げられてこなかったのかもしれない。

彼女たちの話は総括できるような均質なものではなく、ただそれを皆で聞くことに意味があると考えています。個人的に、傾聴することの価値を感じています。飛行機の隣の席で赤ちゃんが泣き叫んでいる時、私は前は、まともに本も読めないし仕事のメールも書けないし睡眠をとって体力を蓄えることもできないという、時間が無駄になることに苛立ちました。泣き声を、私に止める権利がないなりっぱなしの目覚まし時計みたいなノイズに感じました。でも、コラボレーターの俳優 Olga Mouak が、彼女の赤ちゃんは常に死の可能性を秘めた存在で、その泣き声は死の警報で、声がまるでナイフのように彼女を刺して対応を迫ってくるのだと話した時から、私は自然と赤ちゃんの泣き声を受け入れるようになりました。そこにある恐怖や不快に耳を澄ませて、母親の不安を想像するようになりました。

そうする中で、彼女らが子供たちという脆弱な立場に寄り添うための非効率な時間性がディスプレイアドバンテージであるという社会、私がそうであるような、エゴイスティックに自分の最速のペースで走って最大の生産性を求める者が力を握る社会に、怒りを感じはじめました。

#### なぜ日本ではなくヨーロッパでこのリサーチを？

上田久美子：私は機会時計で測られる均等な時間がある日本に生まれてきましたが、日本ではそのような、一定して進む時間の概念が導入されたのは、たった 150 年前なんです。それまでは、日の出から日没までの時の流れを 6 つに分割して、その分割点で、寺の鐘をつけて時間を知らせていました。つまり“1 時間”は夏には長く冬には短い。そして夜の“1 時間”は夏は短く冬は長い。そのころまで暦も西洋の太陽暦ではなく太陰暦を使っていて、地域や村によって日付けもずれていました。カレンダーや時間を、支配者が非支配者の管理のツールにすることは“先進国”では日本が一番最後に導入したのです。時間で労働を管理することはコロンブスの時代のジェノバの商人たちが始めた説がありますが、機械時計により人間が管理される時間性が、大航海時代に各地にもたらされ、極東まで到達する旅路で、人間にどんな影響をもたらしたのか。起源の地であるヨーロッパの人々、旧植民地の人々にもリサーチがしたい。

**西洋で始まった近代化、つまり資本主義化とグローバリズムが日本にも到達して、あなたの時間を、本来のそれではないものにしてしまったと？**

上田久美子：日本は、150 年前に、日本の港を活用したい西洋諸国が軍事力で迫ってきたので開国しましたが、それまでは長い間、国境を閉ざしていました。未踏の日本に踏み込んだアメリカ人やヨーロッパ人は、日本人は 2 時間も約束に遅刻する、とすごく怒っていたそうです。150 年前の私の先祖はそれぐらい、機械時計で測られる数字にとらわれていなかった。約束をしても約 2 時間ごとの鐘しか目印がないので、いつ家を出るか感覚的に判断して、互いに待ち合うことを厭わなかった。時間は季節により伸び縮みするうえに主観的なものだった。日本人が時間にルーズだと怒られていたなんて信じ難いですが、日本は今や世界的にも時間に厳格な国であり、長時間労働の国であり、出生率が極度に低下した国の一つです。

**自身が子供を持たなかったことと、近代的時間性が妊娠出産する身体や子供の時間性を置き去りにしていることが、関係があると思いますか？**

上田久美子：はい。個人的な特質も影響していますが、世界が私にそうさせなかったという感じは確かにあります。

**女性たちにインタビューしているとのことですが、子供をケアする男性もいますし、貧困から子供を持たない男性もいますよね？**

上田久美子：もちろん。わたしに子供を作らせなかった「世界」は、大都市の企業や役所が

労働者たちに促している行動パターンのようなもので、それは男性も抑圧しています。

**それはどんな行動パターンですか？**

上田久美子：私は大学を卒業して、製薬会社に就職しました。20年前の日本はやっと、女性も重要なポストにつきやすくなったタイミングでした。そこで私は、入った会社ではまだ珍しかった女性のエリート候補となって、男性エリートたちと競合することになりました。そこで気が付いたのですが、会社という場所では、男性社員たちは、薬を作って売ることそのものではなく、自身が社内や社会のヒエラルキー内でなるべくいいポジションを獲得することを労働のモチベーションとしていました。そうして得たポジションの価値を実感させてくれるのは、美しい女性や美しいマンションでした。実際、いいポストを得れば、他の男性が羨む好条件の妻を得やすいです。女性はその人の価値を証明するためのトロフィーのような存在です。仕事の後で同僚や取引相手と飲みに行くバーでは、ホステスたちが「部長」「役員」などその人の称号によってちやほやして微笑みかけ好意を注いでくれます。この酒席での社交は全国で日常化していて、男性社員らが女性らから評価されるポジションを持っているという確証を与えてくれるのです。

そのような社会で私が男性エリートたちと同じ仕事をはじめると、居心地の悪さにおそわれました。周囲の男性が「なんでトロフィーがレースに出て走っているのか？」という違和感を感じているのを察しました。そして私は会社を辞めました。ある霊長類学者は、多くの霊長類において、同種間の殺戮行為は、メスを取り合うオスによる性淘汰のための競合に起因すると唱えましたが、それは人間においても競争の大きな動機です。

一方で、シルヴィア・フェデリーチ (Silvia Federici) の『キャリヴァンと魔女 (Caliban and the Witch)』における、中世のペスト禍のあとに何が女性たちに起きたかという記述のなかに、こんな話があります。ペストでの人口減少による労働者不足のおかげで強い立場に立った労働者たちは、地主らに労働への不満をぶつける反逆行為を行ったので、その鬱屈を和らげるために国家は、女性への強姦を容認するようになったという話です。また、男性労働者が稼いだ貨幣を使うための売春宿も推奨されたと。つまり、労働力を搾取したい側が、男性労働者たちをコントロールするために、女性に不満の矛先をむけさせ、女性を男性労働者の下に置くことで支配欲を満たさせ、ミソジニーを植え付けたということです。この信じ難いヨーロッパの歴史と、私が所属していた日本企業社会のシステムは完全に相似形です。私は、男性労働者たちを責めてはいません。彼らも、国や資本家から操作され搾取されている側なのです。これから男性にもインタビューの対象を広げたいです。最近、産まなかった女性たちにもインタビューを始めました。

**生政治 (bio politics) が、男女の不均衡を生み出し生産性のモーターを回してきたということでしょうか。あなたは結婚や出産の忌避によってこの生政治に反抗したのですか？**

上田久美子：意図した反抗ではありません。ただ私の生まれた家族がまさに生政治の思うツボな父権的な家族だったトラウマで、家族を作る強い欲求が起きなかったのはありますね。それに加えて昔ほど社会的プレッシャーがないので気づいたらこうなっていた。社会の影響で自分の本能か何かが変質させられた結果「人生をやり損なって孤独になる」のではないかという不安も抱いています。

**意志的に産まないと選択するのでなく、不可抗力的に身体あるいは精神への影響を受けたのでしょうか？**

上田久美子：そう思います。

**そのような問題に対し、作品は、時間性という角度から向き合うということですね。**

上田久美子：私たちがその中に生まれたために空気のように無視している、現行の時間性を、作品によって対象化したい。

近代の時間性は、“健康”とされた男性たちの身体を基準として、国が人々に労働させるために、生産性を高めるために普及させてきたものです。

エルザ・ドルラン (Elsa Dorlin) は『人種の母胎 (La matrice de la lace)』で、かつては国家による医学が女性を生来の病的な身体の持ち主として妊娠出産を病気とみなし、その後人口増加が必要になると、健康な出産を女性の健康の条件に変えたと論じていますが、今やそれに加えて、男性と同等に働くという“道徳上の”健康さえ女性には要求されています。でも男性の育児休暇の制度が導入されても、夜中に1時間毎に起きて授乳するのは女性です。出産後1~2年は脳の変化によって文章が前のように書けなくなったという同業者の女性も複数知っていますが男性では聞いたことがありません。社会の要求が女性にとり高負担なのは、出生率の低下が示していますよね。

今の社会はまだ、かつて生政治が女性を主婦の地位に押し込めて子供と共に社会から排除していた頃の時間性をそのまま受け継いでいます。全速力で計画通り行動できない人がアクセスできない場所が多すぎます。大都市の駅も、オフィスも、劇場客席も、赤ちゃんを連れて“もたもた行動して周囲の速度を乱す”人は、アクセスできません。

国家は、オフィスが子どもという生産性を下げる存在を受け入れない場所であることは変えず、仕事場に子供を連れてきていいとするかわりに、保育所を増やして親が子供なしで仕事に行けるように働きかけます。国家はいまだに、男性を搾取するために作られた環境に、女性も入ってくるよう促しています。

今まで母親たちにインタビューして、自分の一番苦しい役目は、子供への社会的時間のトレーニングだ、という人が多かった。ぐずぐずする子供を叱って保育所に間に合わせなければ

いけない。毎日続く攻防に耐えきれず、子供に手をあげないよう自分をバスルームに閉じ込めて自分で自分を殴ったという女性も、別の部屋に行ってあらゆる物を壁に投げつけたという女性もいました。社会的圧力のせいで母親は子供に心ならずも無理強いをして、親子の関係も悪くなる。そんなふうに母親たちが近代的時間の兵士を調教させられるのは、グロテスクだと感じます。

私は、男性労働者たちが国や資本家から強いられてきた社会的時間の中に女性までも入るかわりに、男性も子供を産まなかった私も含めた皆が、母親や子供達の時間性に入ることを試したいのです。それは、この世界で増大していく競争と暴力性への、レジストだと思います。

聞き手 Tetsumi Gaida